
 学 会 記 事

第28回新潟画像医学研究会

日 時 平成4年10月31日(土)
午後2時～6時
会 場 県立がんセンター新潟病院
2F講堂

I. 一 般 演 題

1) 老年期痴呆患者の両側鉤間距離
—MRIによる検討—

羽生 春夫・杉山 壮
阿部 晋衛・小林 康孝 (立川綜合病院)
立川 信三・勝沼 英字 (表町病院内科)

老年期痴呆患者の側頭葉内側面の萎縮を簡便に評価するため、MRIによる水平断像から両側鉤間距離を測定した。アルツハイマー型痴呆の鉤間距離は 34.2 ± 2.3 mmで、脳血管性痴呆の 29.5 ± 2.7 mm、健常老年者の 26.0 ± 2.3 mm に比し有意な拡大がみられた。特に健常老年者とは1例のオーバーラップもなく完全に鑑別可能であった。脳血管性痴呆やその他の痴呆患者(パーキンソン病、正常圧水頭症、ヘルペス脳炎、低酸素性脳症)でも鉤間距離は健常老年者に比し拡大傾向を示した。鉤間距離の測定は海馬、海馬傍回、扁桃体などの萎縮を間接的に評価でき、適性な水平断層が得られ測定すべきスライス面が一定であれば簡便な定量的評価法と考えられる。本検討から老年期痴呆患者の診断、殊にアルツハイマー型痴呆の補助診断の一つとして有用であり、実際の臨床応用に適すると考えられた。

2) Tolosa-Hunt 症候群の MRI

高橋 祥・小股 整 (水原郷病院)
今野 公和 (脳神経外科)

近年 Tolosa-Hunt 症候群(以下 THS)を海綿静脈洞に局限した true THS と、副鼻腔炎等を伴った THS variant に分類する傾向にある。我々は2例の THS(内1例は生検で肉芽腫を確認)を経験しその MRI 像について検討した。症例1:68才男性。経過中転移性腫瘍も否定しえず、また Steroid に対する反応も乏しく、開頭生検を行い肉芽腫であることを確認、その後脳神経症状は徐々に改善。症例2:59才女性。典型的な脳神経

症状は Steroid に良く反応し全快。以上2例とも MRI では蝶形骨洞炎を伴っていることが判明した。

症例1は Steroid の著効しない症例で、画像上も THS variant であったが、組織学的に true THS を証明しえた症例であり、症例2は症状経過からは true THS であったが、画像上は THS variant であった。以上より画像上で THS を true, variant と分類するより MRI を詳細に検討して副鼻腔炎が合併しているかどうかを確認し、その結果を治療に反映すべきと考えられた。

また THS で海綿静脈洞部から直接組織確認を行えた症例は少なく、我々が渉猟しえた範囲では12例のみである。またこの中で MRI の報告があるのは我々の症例のみであり、貴重なケースと考えられ報告した。

3) Posterior scleritis の CT 所見

岡本浩一郎・伊藤 寿介 (新潟大学 歯科)
登木口 進 (放射線科)
古澤 哲哉 (新潟大学放射線科)

Posterior scleritis(以下 PS)は、1902年に Fuchs により初めて報告された後部強膜の炎症性疾患の総称であるが、その後の報告例も少なく比較的稀な疾患と考えられていた。しかし超音波やX線 CT により後部強膜の病変が直接描出されるようになり、報告例が増加しこれら検査法の重要性が認識されてきている。今回我々は PS と診断された2症例につき CT 所見を中心に呈示し、idiopathic inflammatory orbital pseudotumor(以下 PsT)との関連性につき検討を加えた。1例は造影効果を示す後部強膜の肥厚を示し、PS に特徴的といわれている所見であった。他の1例は多彩な眼窩内の所見を示し、PsT と考えられるようなものであった。PS は PsT の一型であり、眼科的に捉えられるものであると考えられた。

4) 蝶形骨洞部脊索腫の MRI 所見

増田 浩・外山 孚
小泉 孝幸・小林 勉 (長岡赤十字病院)
酒井 雅史 (脳神経外科)

症例:55歳男性。複視で発症。左嗅覚低下。左動眼神経不全麻痺、左外転神経麻痺を認め、頭蓋単純写でトルコ鞍～斜台骨非薄化を、トルコ鞍断層撮影で後床突起～斜台の骨破壊像を認めた。CT では斜台～蝶形骨洞内の low density mass を認め、造影剤ではほぼ均一に増強され、bone window で斜台骨破壊著明、内部に点状の石灰化像あり。MRI で内部が不均一な T1, T2 の延長をみる mass が蝶形骨洞内からトルコ鞍、一部篩骨洞、